

## 少数民族の叫び

チンダムニ

(訳) 土田 博子・(解説) 阿部 治平

心を傷つけることは団結を損なうことだ。民族問題ではなおさらである。だから、党はこれまで深い配慮をして、少数民族の感情を理解するように何度も指導してきた。特に社会主義建設の時期においては尚いっそう、常にこの問題に注意をはらっていなければならない。全てが大きく変わろうとする時期に、不注意によっていらぬ損失を作り出してはならないからだ。

少数民族の願いや感情を正しく理解することは、簡単なことではない。願いや感情はいつも社会や歴史的条件、物質文化や生活と繋がっている。少数民族の気持ちを正しく理解するためには、その歴史と生活を知らなければならない。

少数民族にはいったいどのような特別な願いがあるのだろうか？どんな事柄が少数民族の心を傷つけるのだろうか？

概括的な回答は難しい。しかし幸い私はこの度中共内モンゴル党委員会が招集した全国宣伝会議に参加した。そして幾人かのすぐれたモンゴル人知識人と触れ合った。彼等は本音で話し、何に喜び何に憂うのかを語った。私はある程度の理解を得ることができ、この文章を書く。

内モンゴルのモンゴル人の歴史は四分五裂であった。分裂はモンゴル民族の発展に重大な影響を与えた。だから民族の運命に関心を持つ者はみなモンゴル民族の統一を渴望するようになった。そしてついに中国共産党の指導の下でこの願いは実現した。

しかし自治が始まった時、内モンゴル統一に対して懐疑的な態度を取る者は少なくなかった。歴代の統治階級はすべて分割統治の方法でモンゴルを統治してきた。この歴史的経験はモンゴル人にとって痛切であり、忘れられないものだったからである。

しかし事実の発展はおよそこれらの人々の予想に反し、なんと内モンゴルの統一は実現したのである。全てのモンゴル人は、特に懐疑的な態度を取っていた人々は心から喜んだ。この夢にまで見た願いがついに実現し、彼らは共産党に感謝し、党の民族政策を深く体得したのであった。

しかし、また一方で「7対1」の形勢が生まれた。内モンゴルはモンゴル人を主体とした民族自治区であるが、漢人の人口は依然として絶対多数を占め、800万以上の人口のうちモンゴル人は120万余りだ。これは歴史が造ったものである。この局面は自治区建設に有

利であり、十年来、大多数の漢人同胞の援助を得て自治区建設は大きく加速した。もし、この援助がなければ現在の自治区はなかったであろう。これは成果である。

反面このような客観的現実、民族の特徴や民族感情を軽視する状況を生み出した。だから、我々は特にこの点に注意し、つねに民族の特徴を軽視しないように警戒しなければならない。しかし内モンゴルのある方面では十分ではない。

十年来の内モンゴル建設について語るとき悲喜こもごもの感慨を持つには、理由がある。十年で内モンゴル自治区建設が大きく進歩したことは喜ばしく、手本にするに足る。何の憂うべきことがあろうか？しかし別の観点、つまり民族の観点から見ると、民族の特色と民族の形式についてしかるべき配慮をされず進歩していない。特に民族言語と文字はある面では後退している。このまま進めば同化されてしまうのではないかと言う疑いが自然に頭をよぎるのである。

社会主義社会を迎えるに当たって、自分の民族の特色と言語文字が保存され発展した社会主義民族として迎えるのか、それともただモンゴル民族の空名義を持っただけで実際には完全に民族的な特色を失って迎えるのか？これが、この会での一番際立った問題だった。要するにやはりいつもの問題——言語と文字問題である。

会議の中である同志が次のような問題を提起した。曰く、「人民日報にある人が「ブラジ」のような外来語使用を批判した文章を書いていたが、全くその通りだ。しかし、私達はどうだろう？我々の言語・文字軽視について、私たちの気持ちはどうだろう？我々の（自治区）の漢人の兄貴たちは私たちの身になって考えてくれるだろうか？」

もし仮に、自分の子どもが民族言語を忘れてしまう環境に置かれたら、そしてあなたと話すときもモンゴル語を全く使わずに会話するようになったら、あなたはどうか感じるだろうか？少しでも民族の誇りがある人ならきっといたたまれない気持ちになることだろう。少数民族は歴史的に長きにわたり圧迫を受け同化させられてきた。どんなことであれ漢人より多少遅れたところがあれば少数民族自身にとって喜ばしいことではない。しかしながら彼等はこのような圧迫と同化の下でも自分の言語・文字を保存している。この一点だけでも誇れることではないだろうか。

つまり、民族言語・文字は、民族の形式にとどまらない。重要なことは、それが常に民族的自尊心と関係しているということである。だから民族言語・文字を軽視したり冷やかに無視する態度は、事実上その民族の自尊心を損ない、感情を傷つけているのだ。

この度の宣伝会議でモンゴル人幹部はどうして民族言語文の軽視傾向に対して強烈な憤りを示したのか？おそらくこのような軽視が既に一部のモンゴル人幹部の感情を大いに傷つけていたからであろう。

そうだ。内モンゴルの語文工作は十年来大きく進歩した。この事実は誰もが否定できない。とりわけ新聞出版事業と学校教育の方面では空前の進歩を遂げた。この点は肯定すべきだ。しかし、同化の兆しが確実に存在していることも否定できない。同化の心配は根拠のないことではない。

自治区の首府フフホトについていうと、モンゴル人の子ども達は自分の民族の言葉を忘れた。70～80%の子ども達はモンゴル語を話さない。これは誰の目にもはっきりしている事実だ。漢人の同志も気づかないはずはない。気づかなくても、何年間もうるさく言っていれば聞こえているだろう。モンゴル人の20%は純牧畜地域に住んでいるが、それ以外の80%のモンゴル人は広大な半農半牧地域と農業地域に住んでいるのであるから。

モンゴル語は事実上すでに通用語の役割をうしなってしまった。オラーンチャブ盟ダルハン・モーミンガン聯合旗のあるモンゴル人幹部は旗から盟に行き、さらに盟から自治区に来て合計22日間の大会で結局一言のモンゴル語も耳にしなかった。信じがたいことであるがこれが現実なのだ。

このような現象をモンゴル人はどう感じるのか？ 次の二つの例で説明できる。

文化局の二人のモンゴル人の同志が昨年ジリム盟ホルチン左中旗に赴き、蒙漢団結社の中のモンゴル人老人の家に泊まった。老人は二人がモンゴル語だけで会話するのを聞き、にわかに目に涙をためて言った。「ああ、この数年来で初めてモンゴル人同士がモンゴル語だけで話すのを聞いた。わたらのここのモンゴル語はもう駄目になってしまった！」こう言った時、彼は泣き出しそうだった。

もう一つの例は、オラーンチャブ盟農牧処長バトビリグ曰く「蒙漢聯合社に行ってモンゴル人がモンゴル語を話していない様子を見ると、涙を禁じ得ない！」

モンゴル人は同化されてきた歴史がある。だからこの点について特に敏感だ。上記のような例を考え合わせると、我々は再び同化され始めたという結論に至るのではないか？ ……何人かの同志がそう考えるのは当然だ。

問題が同化されることにある以上、いわゆる空前の進歩とは何であるのか。これは矛盾だ。

互いに相容れない二種類の感情がある。一つは何も気に掛けず、ただ空前の発展だけを見て現実的な危険な成り行きを見過ごすことであり、もう一つは憤懣やるかたなく気をもみ、気をもむあまりに成果を見られないことである。

前者は主に指導者や一部の漢人の同志の感覚であり、後者はモンゴル人幹部の気持ちである。後者の気持ちは理解できる。歴史が彼らに残した傷跡は完全に癒えたわけではなく、現実の成り行きを見ると傷痕は激しく痛むのである。反応は過敏すぎ、指導部は鈍感すぎ

た。民族問題での指導者と被指導者の矛盾はこうして形成された。

内モンゴルの指導部の民族問題への鈍感さには根拠がある。つまり、上記に述べた「7対1」という客観的原因があるがゆえに、指導者の目はいつも大多数を見、少数の「1」はおろそかにされがちだ。加えて、少数の叫びは反映できず、たまに少しは反映されてもいくつかの関所を越えた微々たるもので少しの生气もなくなってしまう。対して、ちょうちん持ちの声は抑揚高く心地よい。その声に耳を塞がれ、か弱い叫びはその中にかき消された。

典型的な例がある。

オランチャブ盟オラト前旗で合作化の中で牧場を大規模に開墾し、モンゴル人牧民は大きな被害を被った。農民と牧民の矛盾は尖鋭になり、漢人とモンゴル族が対立した。しかし、内モンゴル新華分社は依然としてオラト前旗の民族団結を称える文章を書き、なんと内モンゴル日報もこのニュースを一面トップで誇張した。

しかしそれから間もなく、やはり内モンゴル日報の記者によって書かれた文章が掲載された。それは大規模農場開墾がモンゴル人に与えた被害の事実である。記事はモンゴル人牧民の叫びを反映していた。問題はこの叫びを押しつぶした（許されないことだ）ことにある。状況のひどさははっきりしているのに、なお開墾の称賛を強いたのだ。読者は何が何だかさっぱり訳がわからなくなった。

これを宣伝上のゆきすぎと言うこともできるが、党委員会の民族問題に対する姿勢とも関係している。民族地域では民族政策執行の良し悪しは幹部評価の尺度になるが、内モンゴルではなぜかそうではない。民族政策違反に対する罪は軽く、ほとんどは罪に問われることもない。だから一般的に内モンゴルでは民族問題はごくわずかしかり上げられない。特にモンゴル語軽視に対して。その結果、内モンゴルの指導機関は民族問題に対して無感覚になったのである。

知識人問題に対しても同様のことが言える。内モンゴルの高級知識人は本来多くない。しかし、多くなくても皆無ではない。だから守り育てなければならない。彼らは思想的には若干の問題があっても、モンゴル人民大衆に影響を持っているし、能力もある。社会主義建設の中でその積極性を発揮するべきである。しかし、この面での対策は不満を抱かせるものである。

例えば老画家ナイラルトは内モンゴル人民出版社で地図作製に従事しその待遇は普通幹部と同じである。彼は名義上はまだ内モンゴル美術協会の副主席なのに。

またダゲール文字の積極的創設者の一人であるエルドントグトは安住できる住みかもなくあちこち宿を探している。ある日私と歴史文学研究所のアサラルト同志にこのことを話

し、内モンゴルの旧知識人は知識人としての待遇を受けているのかどうかたいへん疑問である、と語った。

アチンガ同志は最も早くに日本に留学したモンゴル人であるが、今だに中学校教員である。彼のような高級知識人がこんな状態にいるべきではない。

枚挙にいとまがないこれらの例は、民族関連方面が著しく軽視されていることの証明であり、見過ごすことはできない。

事実の全ては内モンゴルにおける大漢民族主義がかなり厳しくなっていることを証明している。ある人に言わせれば大漢民族主義はインフルエンザのようなもので目には見えないが普遍的に存在している。よって、悲しいことにかかなりのモンゴル人幹部が大漢民族主義に感染している。モンゴル文字を学習せず、モンゴル語を話したがらないモンゴル人幹部も少なくない。漢人に迎合し自ら進んでそうしている人もいるが、大部分は民族の誇りを傷つけられた結果このようになったのである。

少数民族はいたるところで地位を圧迫されてきた歴史がある。民族主義的感情は其中で形成されてきた。だから当然、民族地区において、それにふさわしい方法で地方民族主義を克服することが重要である。そうしなければ實際上工作はうまくいかない。

ただし少数民族の民族主義は大民族の圧迫によって生じたものであるから、民族主義に反対するには、まず大漢民族主義の批判に重点を置かねばならない。そうすれば少数民族は自ら地方民族主義に反対するようになる。

同時に民族主義を批判する時には、何が民族主義で、何が正当な民族感情や民族のプライドかをはっきりと区別しなければならない。少数民族幹部の民族的プライドと民族愛は関わりあっている。このプライドを批判するのではなく、逆に、守り育てることが少数民族の愛国心を高めることとなり、社会主義建設に役立つのである。

残念なことに内モンゴルにおいてはそうっていない。民族主義に反対する時、大漢民族主義への批判は往々にして表面的あり、ただ口先だけの痛くも痒くもないものだった。地方民族主義(当時は狭隘民族主義といわれた)に対するように、具体的な本当の批判はされたことがなかった。だから多くの漢人の同志達は数年来民族問題について深い教育を受けず、それが民族問題について無関心の気風を作り出した。

漢人の同志の多くは彼らが内モンゴルに来たのは先進民族が兄貴分として自治区建設を助けることだという神聖な目的を少しも理解せず、モンゴル人の気持ちをわかってもらえずに、無知をさらけだした。モンゴル人幹部と相容れず、モンゴル人幹部を軽視し、独断で工作を取って代わった。しかし、ほとんど問題にされてこなかった。

逆に地方民族主義の批判は一撃でたたきのめす方法がとられ、(往々にして)尖鋭で深刻



な批判の中で何が民族主義で何が革命に役立つ民族感情なのかさえ区別されず、激しく攻撃され、もはや立ち上がれないほどに叩きのめされたモンゴル人幹部もいたのである。

宣伝会議の民族言語分科会での討論で一人の同志が次のような発言をした。狭隘民族主義の名の下で犠牲になった人は多いが、大漢民族主義の名の下で犠牲になった人がいるだろうか？モンゴル人幹部の档案資料を開いて見ると、ほとんど（どの）モンゴル人幹部にも狭隘民族主義のレッテルが貼られている——しかし漢人幹部にはそんなものはない。

モンゴル人幹部に対してこの方法が取られたため、漢語がわからないモンゴル人幹部は相手にされない状態が造りだされた。漢語ができなければ知識人と見なされず、民族言語工作に当たっているモンゴル人幹部は排斥され攻撃された。そして、漢人幹部が民族言語・文字を尊重しないだけでなく、モンゴル人幹部自身までモンゴル語・文字を軽視するなどの不正常な気風が横行するようになった。

当時、民族の特色は全く軽視され、漢語を早く身に着けた者が進歩分子と見られた。多少民族意識があり当時のやり方に不満を表せば落伍者である。落伍者になりたい者は誰もいないのでほとんどの者はモンゴル語の習得と使用をきっぱりとあきらめることで進歩性を示した。地方民族主義の「克服」とは言え、これは苦しいプロセスであった。モンゴル人知識人達はこのいきさつを話しだすと、今でも憤懣やる方ない。

また、大漢民族主義の芽生えの好条件を作り出したことによって、民族矛盾を解決する方法が失われただけでなく、反対により深くなり、モンゴル人幹部はより一層民族問題について発言しなくなり、少数民族の要求と願いを表現できる機会は少なくなった。そして、民族政策執行のなかで民族の特色軽視を曖昧にするなどの一連の弊害を生み出したのである。

もちろん、数年来、民族政策執行状況の調査は一度ならず行われ、ある程度問題が明らかにされた。しかし、お茶を濁す程度のもので、めだった改革は見られず、問題解決には至っていない。

現在、役所の「民族化」について騒がれている。この問題がうるさく言われ出してもう数年になるが、今に至るもたいした成果は上がっていない。

「民族化」に対する間違った考え方もある。役所には、通訳を配置すればそれが民族化だと考える指導者がいる。この間違いは説明する必要もない。これでは「民族化」ではなく「翻訳化」だ。つまり、漢語が読めなければ相手にされない状況を生み出しているだけだ。「形式のための形式」の形式主義のやり方を克服することなくして、本当の民族化はできない。

最近、毛主席の「人民内部の矛盾の克服」の伝達学習後、「放と鳴」の雰囲気生まれ始めた。しかし道のりはまだ遠く、抵抗があり、心配する人もいる。だから全ての人に、特に

本音を言うことを心配する人に、「放鳴」の精神をさらに徹底しなければならない。また、内モンゴル党委員会はこれらの意見を真剣かつ慎重に扱い、再び形式主義に陥ってはならない。

特に、少数民族と知識人たちに存分に発言させることが重要である。これまで自分の要求や願いを表現する機会がほとんどなかった彼等が思うところを全て吐きだし、それに耳を傾けることは内モンゴル党委員会の指導者(多くの漢人の同志)にとって有意義であり、現在までの無関心と麻痺症状の治療にきっと役に立つであろう。

### 《解説》

1949年の中国革命から65年を経た今日、中国共産党の政治・経済・社会政策とりわけ少数民族政策を見ると、あの広野を血に染めた革命戦争はいったい何のためだったか。いま原点にかえって冷静に見なおす時期が来たことを感じる。

ここに紹介する手記の著者チンダムニは、1924年に現内モンゴル自治区東部ジリム盟フレイ旗の牧民のいえにうまれた。モンゴル・漢両語を学習したのち、シリンホトの日系学校へ入学し卒業後同校の教師となった。日本敗戦後の1946年、張家口で中共系の「内モンゴル自治運動連合会」に参加、1947年「内モンゴル日報社」に就職。中華人民共和国成立後は1956年「人民日報社」内モンゴル支局に移動した。1962年内モンゴル師範学院で教鞭を取るようになり、文化大革命では迫害されたが、大虐殺を生んだ「内モンゴル人民革命党」事件には巻き込まれなかったようだ。1978年名誉を回復した。

この手記は1957年「右派分子」にされたときの証拠書類である。チンダムニが1957年「人民日報」に渡したが、掲載されなかった。2013年に『著作集』が刊行されたが、それにも収録することができなかったものである。

原資料は、中共内蒙古党委辦公廳選編『民族主義分子反動言行資料(二)』(1958年5月出版)、欽定達木尼的右派言行材料, pp.23-31,「附;欽達木尼:少数民族的呼声」(漢語)である。

(阿部治平)